

豊明希望チャペル礼拝

2026/5/10

「自分自身の目にある梁(はり)」

ルカの福音書 6 : 39~45

今日の箇所は、非常にわかりやすいたとえ話が使われて、格言のような教訓のようなかたちをとったイエス様のお話となっています。

盲人が盲人を手引きする話し、弟子と師の話し、人の目のチリを指摘して、自分の目にある梁(はり)に気づかない者への警告、良い木には良い実がならない話しは、良い人が良い言葉を発しない、悪い言葉だけを発する、そういう、いくつかの話しが集められた箇所になります。

39 節から 45 節までの 6 節だけ引用しましたが、もともとは、別々の時に、別々のところで話された話なのかもしれません。

ただ、大まかな、共通点があるような話しになっています。

結果には原因があると言うことです。原因と結果の関係性の話しですね。その原因が、教えた人であれば、それを聞いた人に、教えた人の内容、真実が現れてくると言うことであります。また教えた側に限界があれば、その限界までしか穂蜻蛉どの場合、教えられないという話しです。簡単にまずはまとめてみますと、8 つほどにも分解できます。一応、このように分解して、わかりやすい例話ですので、御言葉をひとつひとつ丁寧に味わいながら、早速見ていきましょう。

原因：盲人が導き手→結果：穴に二人とも落ちる

「6:39 イエスはまた、彼らに一つのたとえを話された。「盲人が盲人を案内できるでしょうか。二人とも穴に落ち込まないでしょうか。」



これは、16 世紀のオランダ(&ベルギー)の画家、ピーテル・ブリューゲルの絵です。

まさに、今、読みました聖句を絵にしたもので、二人どころか、ついてきたもつと多くの盲人が穴に落ちようとしています。イエス様は、ここで、二つのことを教えようとされていると思います。

1 つは、あなたは、盲人を手引きする盲人ではないかという、いわば原因側への警告です。人を教えようとしていて、実際に、

自分が正しく、神の御心を歩めない人間なのではないかという警告です。それは、簡単に人は人を教えられると思っはならないと言うことであり、自分の限界を正直にみつめ、謙遜になるようにと言うことです。

2 つめは、あなたが、教えを受けている先生は、あなたを導くことが本当に出来る人か、よく考えなさいと言う警告です。これは、後半部分の悪い木からは、悪い

実しかならないから、あなたが、その先生について、良い実を結べないなと悟ったら、早めに、その先生から離れなさいと言う警告、結果側への警告といいたいでしょうか、そういうことです。

ただ、このたとえ話は、ちょっと一つの事だけ、注意しておこうと思いますが、まず、第一に、実際の盲人の方は、特に生まれつきの盲人の方は、何と言いましょうか、目が悪い分、音への警戒感、回りの雰囲気への敏感さにおいて、はるかにすぐれている場合があるということです。

前の教会に、大学生の時に視力を失って、マッサージ店を経営されている兄弟がおられました、盲導犬をパートナーとして、電車を乗り継いで教会に通っておられましたし、なにより、何度か腰を痛めて、見ていただきましたが、私が言わなくても、手に触っただけで、痛い箇所が理解出来、見事に治されました。



大学時代に、声楽家で牧師の、新垣勉先生と私の小さい下宿で一泊し、いっしょに旅行をしました。私が暗い顔をしていると、先生、どうしたの？と心配して下さいます。それは、目の見える牧師以上の、観察力でした。

と、言いますより、イエス様が、たびたび盲人の方々と交わり、時に、その病を癒されました。言うまでもない事ですが、盲人が劣っているとかダメだと言っているのではないのです。イエス様は、ヨハネの福音書「9:2-3 弟子たちはイエスに尋ねた。「先生。この人が盲目で生まれたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。この人に神のわざが現れるためです。」とおっしゃられ、盲人であっても、いや、盲人である事を通して、むしろ、神の栄光を現す、それが出来るとおっしゃいました。そして、逆に、聖書の専門家で教師であるパリサイ人に向かって、ヨハネの福音書「9:39 **あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。』**と言われました。

そして、これは、なによりも、イエス様ご自身のことを言われているのです。その意味は、私があなたがたがたとえ目が見えなくて、人生が見えなくても、罪が見えず、罪の結果である死を手招きしてたぐり寄せているような人間であっても、私(イエス・キリスト)が、手を引いて、天国へと導くことを信頼しなさいという事でもあります。次は。

原因：A師→結果：弟子がA師以上にならない

「6:40 弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。」

盲人の例と同じような趣旨とはなりますが、人は教師次第で変わりもするし、いつまでたっても、変わらないということであつたら、その原因は、あなたが信頼している教師にあるということです。教師のレベルまでは到達出来るが、それ以上にはいかないということですね。ここにも、結論は、イエス・キリストこそ、あなたを、あなたの人生を正しく導くことが出来るお方だということです。



私は、仏教で、禅宗にしても、臨済宗などにしても、必ずしも全部が、悪い教えだとは思っていません。もっとも、聖書の真理に似ている部分もあって、それだけに、真理だと信じ込んでしまって、かえって傷を深くしてしまうということがあると言う面では、宗教は悪いです。ある種の尊敬はしますが、けっして、キ

リスト以外を師、教師としてはいけないということです。

わかりやすく言えば、八合目までは登れるかも知れませんが、それ以上には決して行けません。頂上に行ってみてこそ、日本一の高さから見る景色を見ることが出来ます。イエス・キリストによらなければ、天国に行けません。天国の景色を見る事が出来ません。

次はこの例えです。

原因：ハリが目にある指摘者→結果：他の人の目のチリをとれない

「6:41 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。6:42 あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことができます。」



この絵を見て下さい。自分の目に梁(家の構造を支える太い横柱ですね・・・古い家などを見ると、一番頑丈で太い、自然の木などが使われます)が刺さっている人間が、あなたの目には、チリが入っているから、とってあげようかと、助言している絵です。ちょっと滑稽にみえますね。真理を知るイエス様から見ると、人の罪を指摘し、解決法を教えている宗教家や、哲学者を言われるような人を見ていて、この絵のように見えると言うことです。

イエス様には見えているのです。何が？それは、すべての教師と呼ばれる人達の愚かさです。

ある牧師が、自分を先生と呼ぶのはやめてください。私の教会では、私のことを、兄弟と呼ばせているのですと。私は、彼に、それは、教会員は呼びにくいでしょうね・・・と言ったのですが、実際に教会でどう呼ぶかは別として、イエス様が、弟子達に向かって、マタイの福音書「23:8 **あなたがたは先生と呼ばれてはいけません**」とおっしゃられたとき、私たちにとっての教師は、ただ一人イエス・キリストであるべきことを教えられているのです。

次に。

原因：良い木→結果：良い実 (×いばら→いちじく ×野バラ→ぶどう)

原因：悪い木→結果：悪い実

「6:43 良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありま

せん。6:44 木はそれぞれ、その実によって分かります。茨からいちじくを探ることではなく、野ばらからぶどうを摘むこともありません。」

すでにたくさんの似た例を教えられてきていますから、このような図をあえてあげるまでもありませんが、ここには、イエス様が、聖書の教えに従う人、あるいは、まことの神、天地万物を創られた神に従って生きる人、イエス・キリストに命を救われて、罪赦されてイエス・キリストによって生きる人が、どんなたくさんの良い実を結ぶかということにおいて自信がある、私に従えば、必ず良い実を結ぶという自信があるという、そういう、自信、そういう確信のようなものを感じる箇所だなあと思います。



その自信、良い実を結ぶかもしれないではなく、必ず結ぶという強い確信は、それに続く聖句が、他の例に比べても、それ以上に近い、ほぼ同じ内容を繰り返しているだけという例を加えたことで、伝わってくるように思います。

木にたとえた後は、良い倉からは良い品が、悪い倉からは悪い品が出てくると言うことです。ただ、一つ進展があります。それは、その倉なり、その木なりを人間にたとえ、その人間の口から出てくる言葉にたとえている点です。見ましょ

原因： **良い人** (良い倉) → 結果：よい物を出す

原因： **悪い人** (悪い倉) → 結果：悪い物を出す

原因： **悪い心** → 結果：悪い言葉(口)

「6:45 良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。人の口は、心に満ちていることを話すからです。」

特に、ここでは、この言葉に注意を向けます。

「人の口は、心に満ちていることを話す」です。

私は、牧師として、牧師ほど、危ない仕事はないなあと感じることがあります。それは、その口から出る言葉が、その人(牧師)の、人となりや、考え方、あるいは、価値観、人生観のそのすべてを、おおかた表してしまうからです。

神学校では、そういう意味で、自分の言葉、自分の考えとならないために、多くの神学校では、ギリシャ語やヘブル語をいやというほどやります。

そして、その前後関係を、チャートにして、まるで国語かなにかの教育のように、作者の言わんとすることを正確に聞こうとする学びをします。

私は、それは、牧師の訓練だと思っています。一つは、聖書が神の言葉であること、ですから、それにふさわしい、聖書、御言葉への向き合い方を訓練するためです。聖書の価値観、聖書の教え以上のことも、以下の事もけって語らないという、自制、自分の言いたいことを抑える訓練をします。

しかし、それでも、やっぱり人間が語る以上、人生や罪が出てしまいます。恐い職業だと思っています。イエス様が、しかし、あえてこのことを話すとき、いずれにしても、私たちが、徹底して知らなければならぬのは、良い物を出せるのは、

聖書だけであること、そして、神さまだけであること、イエス様だけであることを、聞く者はもとより、語る者も、いつも、立ち返り、修正しなければならないという事だと思えます。

牧師や教師に限らず、私たちが日々、御言葉に向き合い、御言葉から教えられるときも、正確には、私という人間、あるいは教師が御言葉を解釈して、私を教えています。そこには、必ず私という、特に罪人私というフィルターがかかって、御言葉に向かい合っていることを謙遜に理解しながら、御言葉から聞きたいと言うことでもあります。さて、一つ一つの御言葉を味わいながら見てきました。

今週の歩み。まことの導き手、まことの教師、良い実を必ず生じさせる良い木、良い品を必ず出す、良い倉であるイエス様に、そして、その御言葉にこそ聞き、従い歩む、そして、良い実を結んでいく歩みでありましょう。